江津の原工務所建設
メガソーラーが完成

大規模太陽光発電所の完成を祝いテープカットする出席者＝江津市敬川町

江津市敬川町の建設業、原工務所（原諭社長）が、本社近くの社有地で建設を進めていた大規模太陽光発電所（メガソーラー）が完成し、8日に竣工式があった。3月下旬から稼働を開始しており、年間5千万円の売電収入を見込む。

最大出力約1・3メガワットの「敬川メガソーラー発電所」で、年間発電量は一般家庭400世帯分の消費電力に相当する。国の「固定価格買い取り制度」に基づき、1キロワット時当たり42円で中国電力に売電する。

約2万平方メートルの敷地に8800枚の太陽電池パネルを敷設した。総工費は約4億円。運営は、新設した関連会社のソレック（江津市敬川町）が当たる。

式典には田中増次江津市長ら約25人が出席し、テープカットで完成を祝った。

木質バイオマス

江津に国内最大級発電所

名古屋の企業 1万キロワット 林地残材活用

総合商社の豊田通商（名古屋市）などが出資する「エネ・ビジョン」（同）が中心となって、江津市内で国内最大級の木質バイオマス発電所の建設を計画していることが9日、分かった。出力1万キロワット前後で、2015年度中を稼働目標に設定。森林に放置された枝や切り株などの林地残材をチップ化して燃料に使うことで森林環境の改善が図られ、原木伐採などによる雇用創出で林業の振興にもつながると期待される。

松江では別企業計画

12年に始まった国の「固定価格買い取り制度」で、未利用木材を使ったバイオマス発電の売電価格は1キロワット時33円60銭の高値に設定。参入環境が大幅に改善された。

関係者などによると、同発電所は、県営江津工業団地（江津市松川町）が建設候補地に浮上し、建設費は40億円前後。年間発電量は一般家庭3千世帯分程度の消費電力に相当し、売電収入は最大で年間約24億円を見込むという。主に県産材で作ったチップを燃料に使う。

発電所で用いられるチップは、県内の林業者でつくる「県素材流通協同組合」（浜田市片庭町）が供給する予定という。

山陰中央新報社の取材に対し、エネ・ビジョンは「現段階では何も申し上げられない」とコメントした。

また、アルバムなどを製造する島根ナカバヤシ（出雲市矢野町）を子会社に持つナカバヤシ（大阪市）のグループが、松江市内で木質バイオマス発電所を検討中で、出力は6千キロワット前後の規模という。

2基の運営・管理や、原木の伐採・運搬などにより、合わせて100人を超える雇用が生まれると見込まれる。計画が実現すれば、安価な外国産材の流入に苦戦してきた県林業が攻勢に転じるきっかけになりそう。

県土67万ヘクタールの8割を森林が占める島根県だが、林業は縮小傾向。スギやマツなどの原木価格が下落する中、10年の林業産出額は48億円となり、ここ20年間でも3分の1以下に減少している。